

## Vimalaprabha「タントラの所説の略説」の章における引用文献について

著者	松本 峰哲
雑誌名	論集
巻	24
発行年	1997-12-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129772">http://hdl.handle.net/10097/00129772</a>

# *Vimalaprabhā*「タントラの所説の略説」の 章における引用文献について

松 本 峰 哲

## は じ め に

*Vimalaprabhā* (*Śrī laghukālacakratantararāja-ṭīkā vimalaprabhā*; 以下 *VP*) は、10 世紀後半から 11 世紀初めに成立したとされる *Kālacakra-tantra* (*Paramādibuddhoddhṛta-śrīkālacakra-nāma-tantra-rāja*; 以下 *KT*) の最も重要視されている注釈書である。実際 *KT* はすべてスラグダラー調の不規則なサンسكريットで書かれており、隠語が多いことから *VP* の解釈なしでは理解することが非常に困難である<sup>1</sup>。

この *VP* が注釈する *KT* は仏教タントラに於いて最も遅れて成立した經典であり、成立は 1027 年を上限とする 60 年の間、作者は伝承によると文殊の化身で初代シャンバラ国のカルキ (Kalki) であるヤシャ (Yaśa) 王であるとされている。この *KT* が成立したと思われる 11 世紀のインドは、ヒンドゥー教の繁栄とイスラム教徒の侵入で仏教徒にとっては厳しい時代であったと思われる<sup>2</sup>。このような時代に編纂された *KT* は回教の撲滅を悲願とし、回教徒に対して共同戦線を張るためにシヴァ・ヴィシュヌ教徒等のヒンドゥー教勢力と共に金剛乗 (Vajrayāna) の結成を提唱するというきわめて特殊なテーマを持っている。

またインド密教史に於いても、最も遅れて成立した經典としてプトンは彼のタントラ分類法に於いて父・母両タントラを総合止揚する双入不二 (yuganaddha) のタントラとして教判上最高位に位置づけている。

では、このような複雑な時代背景をもつ *KT* はどのように父・母両タントラの教義を取捨選択して取り入れているのであろうか。さらには *KT* の提唱する金剛乗とはいかなるものであろうか。

そこで今回は VP の「タントラの所説の略説 (*Tantrade śanodā śa*)」の章の、特に引用文献を中心にして KT の教義的特徴について考察してみたい。

### 1. 「タントラの所説の略説」の章について

この章は KT 全 5 品 1047 偈の教義を略説した章であり、VP に於いてはこの前にある「正道を求めることの制戒の略説 (*Sanmārganiyamodde śa*)」の章と、後に来る「教主と請問者と根本タントラとラグタントラの関係の略説 (*De śa kādhya śakamūlatantralaghutantrasambandhodde śa*)」の章と共に、この 3 つの章だけは直接 KT の偈に対して注釈を加えていない。「正道を求めることの制戒の略説」の章は VP の一番最初に位置する章であり、文殊に対する帰依文で始まり全て偈のみで構成されている。また「教主と請問者と根本タントラとラグタントラの関係の略説」の章は、KT 及び VP の成立過程を物語文学の様にドラマチックに記述している。

さて、本題である「タントラの所説の略説」の章であるが次のように内容的に 3 つの部分に分けることが出来る。

1. 『根本タントラ』の主題、制作の目的、ラグタントラ・注釈作成に関する授記
2. 『根本タントラ』の目次
3. 1 の部分に関する逐語的な解説

1 の部分は非常に簡潔な文で教義がまとめられており、3 は他經典からの引用を用いながら逐語的に 1 の部分を解説している。つまり 1 と 3 の間に sūtra と bhāṣya の如き関係が成り立っているとも言える。また『根本タントラ (*Mūla-tantra*; 以下 MT)』については本論文の初めに示した KT の正式名称からもわかるが、伝承によると 12,000 偈の『最勝本初仏タントラ』を要約したものがいわゆる KT であり、MT とはこの『最勝本初仏タントラ』のことである。ただこの MT は現在梵蔵共に発見されておらず、タントラ經典にいくつかの引用が見られるだけである<sup>3</sup>。

本論文は、特に3の部分の他經典からの引用文と思われる部分を中心に考察を進めていく。

## 2. 「仏であることの果」に関する仏世尊の言葉

VP はまず、「真言乘に於いて仏世尊は次のように言われた (mantrayāne buddhabhagavatoktam tadyathā)」として次の偈を引用している。

「チャンダーラや竹細工人等と五無間罪を為す者達も真言行に従って行動すれば、この生のうちで仏になることができる。」<sup>4</sup>

この偈は「仏であることの果 (buddhatva phala)」はどのような人に授けられるのかということについて論じられている箇所引用されている。VP はまず初めに「制戒を欠いた所化の人々の自身の意欲に応じてこの生において仏であることの果を与える」<sup>5</sup>と簡潔に示した後、この文に逐語訳を加えている。その内容を簡単にまとめると「制戒を欠いた所化の人々」とは声聞の戒である五欲の禁戒を守らない人々のことであり、「自身の意欲」とは二根(dvīndriya)、つまり男根・女根による大楽(mahāsukha)であると解説している。また「この生において(iha janmani)」に関する解説では「この生」とは人間の生であり、その理由として「天等の五趣に生まれると無業の地に生まれてしまうことになってしまうから」<sup>6</sup>とし、人間の生でなければならない理由として業を挙げている。そして、真言乗以前の仏教では「福と智の聚と六界の自性(を有する)大いに卓越した人に(仏であることの果を与える)」ということであって、他の悪業を有する人の生に「仏であることの果」を与えるとは如来の定めるところではない<sup>7</sup>と、いわば前置きをした上で上記の偈を引用している。この偈に於いてはアウトカーストの者達であっても五無間罪という仏教徒に於いて最も重い罪を犯した者であっても「仏であることの果」の獲得が保証されており、また前述の箇所と合わせて考えるなら、VP に於いては以前の仏教で問題にされる過去世の行いというものは一切問題にされておらず、さらには来世に関してもあまり関心を持っていないようである。

このように全ての人間の「仏であることの果」の獲得を説いている VP であ

るが、しかし唯一認めていない条件がある。それは真言乗に入った後、悪業を為す者達の「仏であることの果」の獲得である。VP においては「真言乗に入った後に悪業を為す者達もまた仏であることの果を得るというのは如来の定めるところではない。」<sup>8</sup>とされている。

VP が「仏であることの果」の獲得の為に最も重要視していることを端的に示すならそれは真言乗に入った後の生き方である。ここでは過去世での行いによる業は問題にされておらず、逆に無業の地である天界に生まれることを否定する<sup>9</sup>。人間に生まれることが最も重要なのであり、人間の持つ五欲も否定されない。だが、真言乗に入った後に悪業を行うなら「仏であることの果」を得ることは出来ない。このことを過不足なく端的に示しているのが上記の偈である。

では真言乗に入った後、悪業を為す者は救われないのか。この問題を解決する為に調伏・度脱といった思想があるのではないかと筆者は考える。

### 3. 肉食に関する MT に於ける世尊の言葉

前述したとおり VP は「仏であることの果」を得るためには真言行に従って生きることを説いているが、では真言行に従って生きるとはどういうことなのか。このことについて VP は肉食についてのみ細かに論じているが、その根拠の一つとして「MT に於いてもまた、世尊はかくのごとくと言われる (mūlatantre'pi bhagavānāha tadyathā)」として次の偈を引用している。

「天と同族への恐れと、祖先と供犠の成就を目的として、そして売るために、調伏し難き悪行者によって罪無き有情が殺される。その人からその肉を買おうとしたり、(その肉を) 食べようとする欲望を起こすことは咎められるべきことであり、供儀をなさない器に落ちた、その(時だけ肉を食す)のみは無罪である。一つの生物の肉が多くのもことによって食べられることは最上であり、多くの生物の肉がひとりの人間によって食べられることが(最上では)ない。真実としては瑜伽を行じるものによって、悲を生じたあとに食されるべきである。無分別の心によってであれば他ではあり得ないから咎められない。一族への執着を滅するために常に食と飲をなすことと不善のアビガマナが、真実を見る持金剛によって開示された。」<sup>10</sup>

上記の偈を引用する前に VP は、瑜伽行者の食べてもよい肉の条件として世尊が説いたものとして「世の人に食べられることも売られることもない牛の群

等の自業で死んだもの、または鬭争などで悪業をなすことにおいて自らの過失によって盗人等に殺された(牛等の肉)」<sup>11</sup>であることを挙げている。さらに、今度は如来の説として「財によって買われるのでもなく、祖先の供養等の目的で殺されたものではない(肉)」<sup>112</sup>を挙げている。

いわゆる仏教に於ける肉食の規定に関しては、一般的には部派仏教では「三種の浄肉」の様に条件付きではあるが肉食は許されており、大乘仏教になると肉食は全面禁止となるとされている。この理由としてはインド社会全体のヒンドゥー・バラモン化による浄・不浄観の広まり、また仏教に於ける如来蔵思想の浸透などが指摘されている<sup>13</sup>。では VP は肉食をどのように規定しているのだろうか。まず VP は「もし(肉)食が無ければ殺すものも無いから、従って(肉を)食べる者も殺す者も(同じ)殺生であるだろう。」<sup>14</sup>と肉食を殺生であるとはっきりと認めている。そして認めた上で前述のような条件を満たした肉を食べることを認めている。肉食に条件を設けて許していることは全面禁止の大乘仏教よりも部派仏教の肉食観に近い印象を受けるが内容はまったく異なっている。部派仏教で許されている「三種の浄肉」とは自分に対する布施のために殺されたということを見ることなく・聞くことなく・疑うことない肉のことであり、乱暴に言うならどんな肉でも食べる本人がその肉の素性を知らなければ許されるとも解釈できる。しかし VP は肉自身の素性を問題にし、肉として食べられる動物の現世での悪業を問題とする。つまり食べられる動物は自らの悪業のために自ら死んだり殺されたのであり、誰かに目的を持って殺されたのではないからこの動物の肉を食べることは殺生には当たらないと解釈している。このことを VP は「目的と責められるべきことによる原因の故に殺生があるのであり、瑜伽者は目的なく責められるべきことの無い肉を食べることを世尊は説いたのである」<sup>15</sup>としている。そして VP は食べられる動物の種類には牛等というだけでまったく触れていない。

次に MT の内容について見てみると、非常に難解な偈であるが VP の説く内容と同じく、ある目的のために殺されたものの肉を食べることは非難されている。特にここでは目的に挙げられている「天と同族への恐れと、祖先と供儀

の成就」に注目してみたい。VP 自身も上述のように如来の言葉として祖先の供養等の目的で殺された肉を食べることを禁じているが、なぜこのような目的が例示されているのか。その理由と思われる記述が VP の他の章に次の様にある。

「ムレッチャの神であるヴィスミツラの説く真言を伴って家畜の頸を小刀で(切ることによって) 殺し、その後、自分たちの神格にマントラをとこなえて殺した家畜の肉を食べるであろう。(だが) 自業で死んだ(家畜の) 肉を(彼らは) 食べないと為すであろう。」<sup>16</sup>  
 「ムレッチャの法でもヴェーダの法でも神格と祖先の為に生物の殺害が為されるべきであり～」<sup>17</sup>

本論の初めにも述べたが KT は回教の撲滅を悲願とし、回教徒に対して共同戦線を張るためにシヴァ・ヴィシュヌ教徒等のヒンドゥー教勢力と共に金剛乗の結成を提唱するというきわめて特殊なテーマを持っている。この肉食の規定の背景にはまさにこのテーマがあると考えられる。すなわち VP の作者は回教徒とヴェーダの間の供儀に関する生物の殺害の共通点を知っていて、この共通点によってインドに回教が広まるのを恐れていたことが予想できる。そう考えると MT の「供儀をなさない器に落ちた、その(時だけ肉を食す) のみは無罪である」という記述は供儀に捧げる生け贄を非難しているのだろう。また VP 本文には肉に関する記述として「牛等の肉」という表現がいくつか見られるが、MT からの引用偈には肉の種類に関する記述は観られない。つまり VP は「牛」を強調しているが、これも回教徒・ヒンドゥー教徒を意識してのことと考えられる。

以上 VP の肉食規定について考察したが、このような肉食に関する記述は父タントラの代表經典である *Guhyasamāja-tantra* や母タントラの代表經典である *Hevajra-tantra* には見ることができず、VP 独特のものと思われる。従って VP の肉食規定は部派仏教から大乘仏教そして密教という流れ、またはインド社会全体の肉食観の変化から生まれたと見るよりは、単に VP 及び KT の持つ特殊なテーマの為に構築された規定なのではないだろうか。確かに MT は肉食に於ける「悲 (*karuṇā*)」の必要性なども説いてはいるが、供儀にこだわる MT と牛にこだわる VP の内容からは仏教以外のことを意識していると考えられ

る。

#### 4. 「Kālacakra」という単語に関する VP の解釈

VP は「時輪たる世尊 (Kālacakra bhagavat)」という本文中の語に関して細かな語義解釈を行っている。「各々の字によれば (pratyekaikaikākṣareṇa)」として、次の偈を引いている。

「Ka の字は動力因が止息したとき, La の字の故に消滅がある。(それは)Ca の字による心の動揺を Kra の字によって次第を結ぶ故 (である。)」<sup>18</sup>

VP は一字一字に対する解説にはこの偈を引くだけで一切この偈に関する注釈は行っていない。

上記の偈については *Sekoddeśa-ṭīkā* (以下 *SUT*) と、同じ VP の「正道を求めることの制戒の略説」の章の中にパラレルな部分を確認した。そして今回問題にしている VP の「タントラの所説の略説」の章と、ここで指摘した二つは共に Kāla と Cakra という語に分けても解釈をつけているが、なぜか Kāla と Cakra に分ける解釈に関しては三つともパラレルな文ではない。関連の箇所を以下に挙げてみると、

VP 「タントラの所説の略説の章」:

「時とは最勝不壊にして大楽の相であり、それによって障を離れた蘊界等の輪に生じる身が時輪である。」<sup>19</sup>

VP 「正道を求めることの制戒の略説」の章:

「時とは不壊の楽を知るものにして、方便は悲を自性とするものである。所知を相とする世間が輪であり、吉祥なる般若は空性を自性とする。」<sup>20</sup>

*SUT*:

「悲の空性を姿とするものが時であり、世俗的なものを形とする空性が輪であると説かれた。時輪は不二にして不壊である。」<sup>21</sup>

「不壊の楽を知ることが一切の障壁を破壊する因にして、(これが)時であると説かれた。方便は悲を自性とし六神通を自性とする。所知を相とする世間が輪であり、三界より成り無量の事象を特相とする輪であると知られる。それは実に般若にして空性を自性とし、一切の相を自性とするものにして、この両者の合一が時輪であると説かれた。」<sup>22</sup>

この三つを比べてみると *SUT* の内容はどちらかというと VP の「正道を求めることの制戒の略説」の章の内容に近く VP の内容をさらに詳しく説明して



いる。このことから筆者はこの三つの出典の関係について考えてみたい。まず、VP の「正道を求めることの制戒の略説」の章は前述したが VP の一番初めの章であり、唯一 VP のなかで偈のみで構成されている章である。また *SUT* はタイトルからわかるとおり *Sekoddeṣa* の注釈であるが、しかし先行研究で *SDT* は *Sekoddeṣa* に関する注釈が不十分でむしろ *KT* の偈に直接注釈を加えている箇所が多いということが指摘されている<sup>23</sup>。さらに *SUT* には VP や *MT* の名も見えることから、*SUT* は初めから *KT*, *VP*, *MT* を前提にして編纂されたとも考えられる。ではなぜ一字一字の解釈では「タントラの所説の略説」の章と「正道を求めることの制戒の略説」の章の偈はパラレルであるのに、*Kāla* と *Cakra* に分けた解釈ではパラレルになっていないのか。さらになぜ *SUT* の内容は同じ VP でも「タントラの所説の略説」の章ではなく「正道を求めることの制戒の略説」の章の内容に近いのか。これだけの資料ではこの答えを出すことは不可能であるが、筆者は偈だけで構成された VP の「正道を求めることの制戒の略説」の章と *MT* との間に何か関係があるのではないかと考えている<sup>24</sup>。

なおここでは VP の二章と *SUT* の関係ばかり論じたが、内容に関しては般若・方便・悲性・空性はタントラに於いて非常に一般的なテーマでありタントラの名前、または主尊の名前にこれらを対応させる方法は *Hevajra-tantra* などにも見ることができる。

## 5. 「最勝本初仏」の解説

VP は「最勝本初仏 (Paramādibuddha)」という語の解説に2つの他經典からの引用と思われる偈を用いている。ここで注意しておかなければならないのは VP において「最勝本初仏」は尊格としての最勝本初仏を指す場合と *MT* のタイトル『最勝本初仏タントラ』を指す場合の2通りの用法があり、ここでは *MT* を指しているということである。従って VP がここで論じているのは *MT* に関することである。

VP の本文を見て行くと、*MT* である「最勝本初仏」に関して「般若と方便

を自性とする瑜伽タントラであって（それは）不二であると最勝なる者によって説かれた」<sup>25</sup>とあり、次に「瑜伽の語は方便の意味を説くものでも般若の意味を説くものでもなく、瑜伽の語は般若と方便の（両方の）意味を説くものである」<sup>26</sup>と論じた上で、「またかくのごとくに言われる (tathā cāha)」として次の偈を引用している。

「瑜伽は方便の身によってでも般若ひとつによってでもあるのではなく般若と方便の合一したものが瑜伽であると諸の如来によって説かれた。」<sup>27</sup>

この偈の引用の直後に VP は「それ故、タントラに於いて般若と方便を自性とする主題はあるが、勝義には般若のタントラでも方便のタントラでもない」<sup>28</sup>、「般若と方便の要点が劣った有情心の意欲のため如来によって説かれた」<sup>29</sup>と続けている。ここまでで言えることは偈中の「方便・般若」が「父タントラ・母タントラ」を指していて、「瑜伽」とは瑜伽タントラであり『根本タントラ』のことだということである。つまり、ここでは MT が父母両タントラを総合止揚する双入不二のタントラであることを強調している訳だが、父母両タントラを不完全なものとして VP は見ているようであるのが印象的である。

また、この偈に関しては出典を確認することはできなかった。この偈に似たものは GS にも見ることができるとは<sup>30</sup>、歴史的に成立が VP より遡ると思われる *Bhāvanākrama* にも「かの菩薩行とは、般若と方便を自性とするものであり、般若だけでも方便だけでもない」という記述が見られる。ここでいう「般若と方便」がタントラを指していないことは明らかであり、そのように考えると VP が引用している偈は本来の偈の意味を婉曲して用いられている可能性が考えられ、いわゆる密教經典以外からの引用も考えられる。

次に VP は、MT は無始無終(anādinidhana)の仏である本初仏(āḍibuddha)によって説かれたものであって一人のシャカムニ仏やディーパンカラ仏によって説かれたものではないという自説の論拠に「金剛手は説く (Vajrapāṇirāha)」として次の偈を引用している。

「過去時の（仏たちによって）説かれ、（未来時の）仏たちによって説かれるであろう（ことを）現在時の等正覚者たちが再三それを説いている。（これらのものが）幻化網大タントラにおいて歡喜する金剛持たちと、無量のマントラを持す者達によって歌い始められ

る。」<sup>31</sup>

この偈は *Nāmasaṅgīti* (以下 NS) の 12, 13 偈とパラレルである。NS からの引用と思われる偈は VP の他の章にも MT からの引用偈と並んで非常に多く見られ、KT 及び VP と NS の関係が深いことは先行研究に於いてすでに指摘されている<sup>32</sup>。12 偈は VP のいう「MT は～一人のシャカムニ仏やディーパンカラ仏によって説かれたものではない」ということを言っているのであろうが、13 偈は難解である。NS には多くの注釈があり、この 13 偈にも様々な解釈が為されているが、先行研究に於いて写本に見られる NS の正式な経典名から NS は現存しない「幻化網大タントラ (*Māyājalamahātāntṛa*)」の三昧網品 (*Samādhi-jāla-paṭala*) の所出であるらしいことが指摘されおり<sup>33</sup>、このようなことから考えると 13 偈は幻化網大タントラと NS の関係を意味しているのではないだろうか。さらに 12, 13 偈を通して考えるなら共に存在しない MT と幻化網大タントラの間に何か関係があるのだろうか。共に現存していないので何も言えないが、気になる部分である。

この偈の引用後、VP は次のように論を進めている。

「集会において「ディーパンカラよりシャカムニの間にはいかなる如来によっても真言乗はとかれていない」とは、その時にその集会によって（真言乗が説かれなかった）と言うことである。聖者の国に法を説くとき、聖者の国の聴衆に法を説かなかったのは四ヴァルナの傲慢で不幸な心の意欲の為である。しかしながら、他の時、他の国の世界の人々に（法を）説かないと言うことはないと如来が言う様に一切如来は三乗を説いたのであり、だがしかし一切智にならなかったのは金剛乗を説かなかった為である。」<sup>34</sup>

ここでいう「集会 (*samāja*)」とは *Guhyasamāja-tāntṛa* (以下 GS) のことを指していると思われ、実際 GS 17 章に、該当すると思われる箇所がある<sup>35</sup>。

内容は当然ながら前述の「MT は無始無終～」という VP の自説をさらに論じている訳だが、ここで問題となるのは「～と如来が言う様に、一切如来は三乗を説いたのであり、だがしかし一切智にならなかったのは金剛乗を説かなかった為である。」の部分である。すなわち金剛乗が三乗より優れているということを主張しているのは解るのだが、では真言乗の位置づけはどうなっているのだろうか。ここでは三乗の内訳は示されておらず、また真言乗と金剛乗の関

係についても論じられていない。今回取り上げている「タントラの所説の略説」の章を見る限りでは金剛乗も真言乗も使い分けに明確な意図が見られない。つまり、真言乗と金剛乗は同じものとも考えることができる。これだけの資料ではこれ以上論じることとはできないが、筆者は VP は金剛乗を真言乗よりも優れたものと位置づけているのではないかと考えている。一つの根拠としては、前述したとおり VP は父・母両タントラを KT より劣るものと位置づけている点であり、ここでも先行するタントラを真言乗と位置づけた上で金剛乗である KT の優位性を主張しているのではないかと考える。

またここで NS の偈が引用されている理由を考えると、引用されている偈は本初仏という KT の思想に於いて非常に重要な概念に関するものであり、NS が KT の成立に深く関与していることを強く印象づけている。VP はこのことも考慮して NS から引用を用いたことも予想できる<sup>36</sup>。

## む す び

以上、VP「タントラの所説の略説」の章に関して引用されている偈を中心に考察を行った。最初にも述べたがこの章は KT の教義をまとめたものなので、他にも引用を用いることなく論じているテーマも数多くある。当然その中に重要と思われる箇所もあるわけだが、今回は引用文献を中心に考察したため、そのような箇所にはほとんど触れていない。

まず引用偈に関しては、MT, SUT, NS からの引用、そして GS にパラレルではないが対応していると思われる箇所があった。このなかで MT, SUT に関してはそれぞれの箇所で見当したが、それぞれ成立や KT との関係に問題があり、かなりの部分が推測で終わってしまった。この問題に関しては今後解決していかなければならないと考えている。また NS からの引用に関しては、従来から指摘されている KT の成立に関する NS の影響を再確認する結果となった。

つぎに思想的な特徴としては VP の業の観念である。このことは「仏であることの果」や肉食の規定について論じた部分で触れたが、VP は過去世の業に関

してはまったく問題にしておらず、逆に現世に於ける悪業に対しては非常に厳しい態度をとっている。五欲を否定しないことなどと合わせて、非常に現世肯定的である。

ただここで注目したいのは、母タントラの的な要素が「タントラの所説の略説」の章に見られなかったということである。例えば母タントラの一つの特徴は性瑜伽であるが、VP は KT の瑜伽の体系に関して GS と NS から借用していることを明言していることがすでに指摘されている<sup>37</sup>。そして章全体を通じてみると、後期密教に関して指摘されるいわゆる性的な表現がほとんど見られない。SUT に性的表現が多く見られることを考えると作偽的なものであるとも考えられる。前述の業の観念と合わせて考えるなら当時のインド社会に対する倫理的配慮さえも感じられる。

したがって VP は、父母両タントラの特徴を単にまとめたのではなく何らかのテーマに合わせて教義の取捨選択や新たな構築が行われているようであり、その取捨選択の基準を考察していくことが今後 VP 及び KT の提唱する金剛乗の教義の解明につながると考えられる。

【キーワード】 *Kālacakra-tantra*・*Vimalaprabhā*・*Mūla-tantra*・金剛乘

[略号及び使用テキスト]

KT: *A Critical Edition of Śrī Kālacakratāntra-rāja* (Collated with the Tibetan version) Edited by Biswanath Banerjee, Calcutta 1985.

VP: *Śrī laghukālacakratāntrarāja-ṭīkā vimalaprabhā* [Vol. I]

Edited by Jagannatha Upadhyaya, Sarnath, 1986.

*Śrī laghukālacakratāntrarāja-ṭīkā vimalaprabhā* [Vol. II, III]

Edited by S.S. Bahulkar, Sarnath, 1994.

SUT: *Sekoddeśa-ṭīkā*

Edited by Mario E. Carelli, Dr. Litt, Baroda 1941.

NS: *Mañjuśrī-nāmasaṅgīti*

Edited by R. Vira, Śata-Piṭaka Series Vol. 18, New Delhi.

GS: *Guhyasamāja-tantra*

Edited by Dr. S. Bagchi, Buddhist Sanskrit Texts-No. 9, Darbhanga  
1965.

## 参 考 文 献

- 岡田明憲 [1988]:『ゾロアスターの神秘思想』講談社現代新書  
下田正弘 [1997]:『涅槃経の研究—大乘經典の研究手法試論』春秋社  
田中公明 [1994]:『超密教時輪タントラ』東方出版  
梅尾祥雲 [1989]:『後期密教の研究 下』梅尾祥雲全集別巻・臨川書店  
羽田野伯猷 [1987]:「時輪タントラ成立に関する基本的課題」  
『インド・チベット学集成/第3巻インド編。』法蔵館  
蜜波羅圭之介 [1971]:「ナーマサンギーティにおける伝達について」  
『日本仏教学会年報』第36号  
K.V. Kane [1974]: *HISTORY OF DHARMASASTRA, Vol. II, Part II*, Government  
Oriental Series Class B, No. 6.  
L. Newman [1987]: *THE PARAMĀDIBUDDHA (THE KĀLACAKRA  
MŪLATANTRA) AND ITS RELATION TO THE EARLY KĀLACAKRA  
LITERATURE*, Indo-Iranian Journal 30-no. 2.  
M. Nihom [1984]: *NOTES ON THE ORIGIN OF SOME QUOTATIONS IN THE  
SEKODDEŚAṬĪKĀ OF NĀDAPĀDA*, Indo-Iranian Journal 27-1.

## 注

- <sup>1</sup> *KT* が不規則なサンスクリットで書かれているのに対して *VP* が正規のサンスクリットで書かれていることから、*KT* はインド外で成立したのではないかとされている。現在では中央アジア起源説が有力であるが、この説に関してゾロアスター教の研究者である岡田明憲氏は氏の著である『ゾロアスターの神秘思想』（講談社現代新書 1988）において、非常に興味深いことを述べている。氏はゾロアスター教の中の一大潮流となったズルワニズム（時間主義）と『アタルヴァ・ヴェーダ』の関係を指摘した上で *KT* との関係について以下のように述べている。  
「ズルワニズムは、ズルワーン（時間神）をもって、善・悪両原理を止揚する。すなわち、アフラ・マズダーとアンラ・マンユは、このズルワーンより生じた双子の兄弟とされるのである。そして、一万二千年を三千年ずつの四期に分け、善・悪両神の戦闘を説く。カーラチャクラでも、原初仏としてのアーディブッダを説き、それにより二元の統一を図る。さらに、この原初仏を一万二千領の根本タントラに結び

つけ、現在のタントラを三千頌とする。興味ある数字の一致がここに見られる。」(上著 pp. 154-155 より抜粋)このことは、ゾロアスター教が中央アジアに勢力を持っていたことや10世紀以降ゾロアスター教徒がインドに移住したという、歴史的事実を考えると興味深い指摘である。

<sup>2</sup> 羽田野 [1987]

<sup>3</sup> Newman [1987]

<sup>4</sup> Skt: caṇḍālaveṇukārādyāḥ pañcānantaryakāriṇaḥ/

janmanihaiva buddhāḥ syurmantracaryānucāriṇaḥ// (VP I, p. 15<sup>19-20</sup>)

Tib: /gdol pa smyig ma mkhan sogs dañ//mtshoms med lha ni byed pa rnams/  
/sñags kyi spyod pa rjes spyad na//skye ḥdi ñid la sañs rgyas ḥgyur śes  
pa yin no śe na/ (Toh no. 1347, 117b<sup>3-4</sup>)

<sup>5</sup> VP I, p. 12<sup>3-4</sup>

<sup>6</sup> VP I, p. 15<sup>14-15</sup>

<sup>7</sup> VP I, p. 15<sup>16-17</sup>

<sup>8</sup> VP I, p. 15<sup>28-29</sup>

<sup>9</sup> VP は、諸天も人間の生を得てから「仏であることの果」を得ることになるとしている。

<sup>10</sup> Skt: devasvabhayapitriṣṭasiddhyartham vikrayāya ca/

nāparādhiḥ hataḥ sattvo durdāntaiḥ pāpakāribhiḥ//

sāvadyam tasya tanmāṃsam kṛitam bhuktaṃ samihitam/

ayājñāṇca patitam pātre niravadyam tadeva hi//

ekasya prāṇino māṃsam bahubhirbhakṣitam varam/

nānekaprāṇinām māṃsam manuṣṇaikaena bhakṣitam//

bhoktavyam yogayuktena karuṇāmutpādyā tattvataḥ/

nirvikalpena cittena niravadyam nānyadeva hi//

kulagrahavināśāyānnapānam ca sarvadā/

akuśalābhigamanam proktaṃ vajrīṇā tattvadarśinā//iti// (VP I, p. 16<sup>13-22</sup>)

Tib: /lha dañ rañ ḥjigs pha mes dañ//ḥdod grub don dañ btsoñ phyir yañ/  
/gdul kkaḥ sdig pa byed rnams kyis//gnod byed min paḥi sems can bsad/  
/de yi śa de ño ba dañ//za ḥdod kha na ma tho bcas/  
/ma blañs snod du ltuñ gyur pa//de ñid kha na ma tho med/  
/srog chags gcig gi śa dag ni//mañ po rnams kyis zos pa mchog/  
/srog chags du maḥi śa dag ni//yid skyes gcig gis zos pa mi na/  
/sñiñ rje bskyed de de ñid las//rnam par mi rtog sems kyis ni/  
/rnaḥ ḥbyor ldan pas bzaḥ bya ba//kha na ma tho med gšan min/  
/rigs su ḥdzin ba gšos baḥi phyir//rtag tu bzaḥ dañ btuñ ba dañ/  
/rigs min mñon bgrod rdo rje can//de ñid gzigs pa dag gis gsuñs śes paḥo/  
(Toh no. 1347, 118a<sup>7-118b<sup>3</sup></sup>)

- <sup>11</sup> VP I, p. 16<sup>6-7</sup>
- <sup>12</sup> VP I, p. 16<sup>8</sup>
- <sup>13</sup> 仏教に於ける肉食に関しては、下田 [1997] を参考にした。ヒンドゥー教の肉食に関しては、Kane [1974], pp. 757-800 が詳しい。
- <sup>14</sup> VP I, p. 16<sup>1-2</sup>
- <sup>15</sup> VP I, p. 16<sup>4-6</sup>
- <sup>16</sup> VP I, p. 27<sup>17-19</sup> “mlecchadevatā vismillāha mantreṇa karttikayā grīvāyām paśuṃ hatvā tatasteṣāṃ svadevatāmantreṇāhatānāṃ paśūnāṃ māṃsaṃ bhakṣyaṣyanti, svakarmaṇā mṛtānāṃ māṃsamabhakṣaṃ kariṣyanti”
- <sup>17</sup> VP I, p. 27<sup>25</sup> “mlecchadharme vedadharme ’pi devatāpitryarthaṃ prāṇātipātaḥ kartavyaḥ”
- <sup>18</sup> Skt: kākāro kārāṇe śānte lakāracca layo’tra vai/  
cakāraccalacittasya krakārāt kramabandhanāt// (VP I, p. 17<sup>15-16</sup>)  
Tib: /kā yig gis ni rgyu ṣi ba//la yig ḥdi la thim pa ṇid/  
/ca yig gis nig yo baḥi sems//kra yig rim pa bcīns las so/ (Toh no. 1347, 119b<sup>2</sup>)
- <sup>19</sup> VP I, p. 17<sup>12-14</sup>
- <sup>20</sup> VP I, p. 11<sup>13-14</sup>
- <sup>21</sup> SUT, p. 8<sup>1-2</sup>
- <sup>22</sup> SUT, p. 8<sup>15-18</sup>
- <sup>23</sup> Nihom [1984]
- <sup>24</sup> Newman [1987] 氏は「正道を求めることの制戒の略説」の章を MT からの引用であるとしている。
- <sup>25</sup> VP I, p. 18<sup>6-7</sup>
- <sup>26</sup> VP I, p. 18<sup>12</sup>
- <sup>27</sup> Skt: yogo nopāyakāyena naikayā prajñaya bhavet/  
prajñopāyasamāpattiryoga uktastathāgataiḥ// (VP I, p. 18<sup>14-15</sup>)  
Tib: /rnal ḥbyor thabs gyi lus daṅ ni//śes rab gcig pu dag gis min/  
/thabs daṅ śes rab sñoms ḥjug pa//de bṣin gśegs pas rnal ḥbyor gsuṅs  
śes so/  
(Toh no. 1347, 120b<sup>2</sup>)
- <sup>28</sup> VP I, p. 18<sup>16-17</sup>
- <sup>29</sup> VP I, p. 18<sup>17-18</sup>
- <sup>30</sup> GS, p. 123 (第18章 32 偈)
- <sup>31</sup> Skt: yātitairbhāṣitā buddhairbhāṣiṣyante hyanāgatāḥ/  
pratyuṭpannāśca sambuddhāḥ yāṃ bhāṣante punaḥ punaḥ//  
māyājāle mahātantre yā cāsmiṇ saṃpragīyate/  
mahāvajradharairhr̥ṣṭerameyairmantradhāribhiḥ//iti/ (VP I, p. 18<sup>25-27</sup>)  
Tib: /ḥdas paḥi saṅs rgyas rnamś kyis gsuṅs//ma ḥoṅs rnamś kyaṅ gsuṅ ḥgyur



ra/  
 /da ltar byuṇ ba rdzogs saṅs rgyas//yaṅ yaṅ gsuṅ ba gaṅ yin daṅ/  
 /rgyud chen sgyu ḥphrul dra ba ḥdir//rdo rje ḥchaṅ chen gsaṅ sṅags ḥ  
 chaṅ/  
 /dpag med dgyes pa rnam dag gis//gaṅ yaṅ yaṅ dag glur blaṅs pa ṣes  
 gsuṅs so/

<sup>32</sup> 梅尾 [1989]

羽田野 [1987]

<sup>33</sup> 蜜波羅 [1971]

<sup>34</sup> *VP* I, p. 19<sup>1-6</sup>

<sup>35</sup> *GS*, p. 116<sup>5-7</sup>

<sup>36</sup> *VP* に次のような記述が見られる「真言乗の一切真言理趣に於ける了義は、*Nāmasaṅgiti* において世尊によって金剛手に対して説かれた。この故、最勝本初仏を知らざる者は *Nāmasaṅgiti* を知らず、*Nāmasaṅgiti* を知らざる者は、金剛持の智身を知らず、金剛持の智身を知らざる者は真言乗を知らず、真言乗を知らざる者は全て輪廻（する者）にして金剛持世尊の道を離れている。」（*VP* I, p. 52<sup>3-7</sup>）

*VP* がこのように記述していることから、*NS* を重要視していることが伺える。

<sup>37</sup> 田中 [1994], p. 194

*VP* III, p. 54<sup>15</sup> “evaṃ daśadhā nimittam samājāday rātriyogena, nāmasaṅgityā ṃ divāyogena bhagavatoktam/”

## On Quotations in “*Tantradesānoddēśa*” (The Second Chapter of *Vimalaprabhā*)

Minenori Matsumoto

*Vimalaprabhā* (*VP*) is the most important commentary on *Kālacakra-tantra* (*KT*). *KT* has a very special theme that Buddhist and other Indian native religions will be united against the invasion of Islam, and organize Vajrayāna. In this paper I study the doctrinal feature of *KT* by means of taking notice of quotations in “*Tantradesānoddēśa*” (The second Chapter of *VP*).

First of all, I have inquired into the source of quotations in “*Tantradesānoddēśa*”. The result has been that I have made certain of the source of four quotations which has been quoted from *Kālacakra-mūla-tantra*, *Sekoddēśa-ṭīkā*, *Nāmasaṅgīti*, and *Guhyasamāja-tantra*.

In view of these quotations, I have studied doctrinal feature of *VP* as follows:

- 1) “*Tantradesānoddēśa*” has few references to karman of the past.
- 2) Doctrinal feature of Prajñā-tantra can not find in “*Tantradesānoddēśa*”

I think that it is important for explicating Vajrayāna doctrine to advance the study about above topics.